

中国殷代の櫛に就いて

梅原末治

【要旨】此の一文は近年世に出た河南省殷墟殷墓出土と認められる若干の玉櫛と一個の骨製櫛とに基いて、殷代の櫛の實際を述べたものである。初に一々の実物を調べた所見を詳しく記して上、それ等に自から一つの型のあつて、この服飾品の上にも当代の文物の甚だ進んだものあることが推考せられる。そして終りに当代の一般の服飾にも論及したのである。

一 中国の殷の時代に装身具として、既に髪飾品があつたことは、早く殷墟の出土と伝える骨製の所謂笄の類に、いろいろなものがあるが存するので、いまや一般に認められていゝる。同じ髪飾の一つである櫛にあつても、殷墟殷墓の発掘がすすむにつれて、その行われた事を推測さす遺品が知られ出して来た。『河南安陽遺物の研究』に載せた大阪江口治郎氏の蒐集に係る玉製品は、その一例をなすものである。然るに此の種の櫛に就いて、過般の欧米の旅で、新た

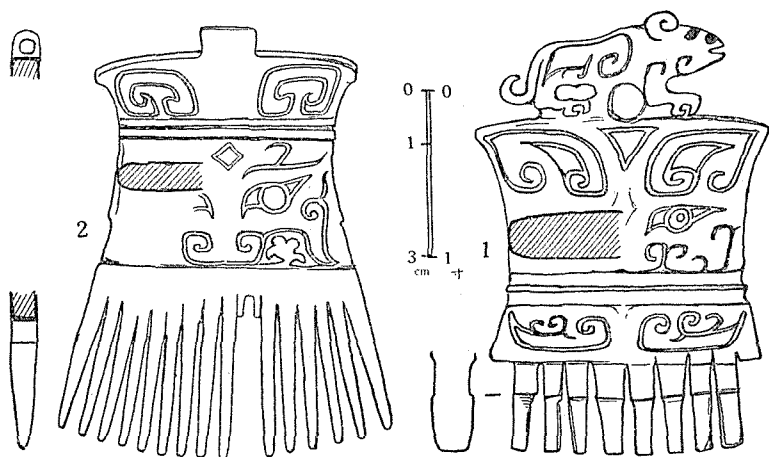
に著しい実例に接したので、是等の関係の資料を整理して、なお不十分な当代のそれに就いての知見を拡充するため、此の小文を書くことにした。

二 さて私の新たに見た櫛の完好な遺品は、仏蘭西のカーンマン氏 (Michael Cahnmann) の所蔵品と、米國紐育のエリクソン氏 (Ernest Erickson) の蒐集に係る二つであるが、相似た玉櫛の一例は既に黄濬氏の『鄴中片羽』初集にも載つて居り、また現在はいくく違つた器形の部分となつ

であるが、それと認められたものが、ミネアポリスのピルズベリー蒐集品 (Pillsbury Collection, Minneapolis Institute of Art) にも存してゐる。そして更に破損はあるが、同様な骨製の櫛が江口治郎氏の許に又収蔵されてあるのて、引いて是等から、先以て当代の櫛の必ずしも稀でないことが推される次第である。

三 是等の櫛のうちカールマン氏の所蔵品は、二寸五分許りの縦長の、而も齒の短いもので、黄褐がかつた色沢の不透明な玉で作られていて、全面がよく磨研されてある。

そして挿図第一の1に示すように、此の櫛の扁平な体の頭部に虎とも見える動物の側面形が丸彫で表わされてあるばかりでなく、所謂浜に当る両面に正面向の獣面が薄い突線文で表出されているのが甚だ目立つのである。主要な八本のその短い歯は、中央が心持ち長いような外櫛をして、細部の上から、全形が作られて後に鋭利な利器で切り込んだものたることが知られる。なお頭部の獣形の下には丸い孔が開いていて、いまその縁辺に可なりの手なれが見えるのは、もと紐などを通じて用いた名残と解す可きであらうか。



挿図第一 玉櫛二個形状図

この櫛を特色づけるその丸彫の獣形が、近年確実な例を加へた殷代の古玉に見るそれと一致するものであることなり、正面向の獣面が同じく、当代の古銅器を飾る所謂饕餮文中の一つの型のであることは、頗る顯著であるので、

引いてこれは現在では全く游離した遺品ではあるが、右の点から同じ時代の所産たることを推し得るわけである。

四 エリクソン氏收藏の他の玉櫛または同大の縦長の

形であるが、この方は頭部には側面に孔を穿つた小突起があるのみで、目立つた飾がなく、上辺で一たん括れた扁平な体の外側が段々と開いて、下端で幅を広めた、歯の長いものであることは、一層櫛としての整うた形を示す。(挿図第一の2) 従つてこの形からすると、既に紹介した大坂江口氏の櫛に似通つている。処でこの器また所謂浜に当る両面に同じく正面向の獣面が突線文で飾られてあつて、それの表出が若干の肉を持ち且つ一種の角をも具えた整つた形であることは、前例のそれに勝るものがあり、殷代の性格を具象することが注目されるのである。なお櫛の歯は十五本であつて、いづれも先端が尖つて、実用品たるにふさわしい形をして居り、同部の加工の鋭利な点が、上記の裝飾文表出の巧緻と相俟つて、当代の攻玉の造詣を推さしめるのである。現在この歯の六本と九本との間にやや広い空隙があつて、一寸見ると一本欠けたようであるが、実物を

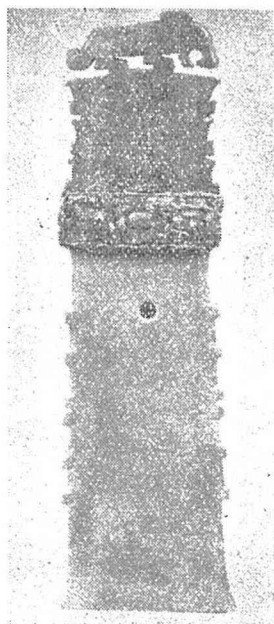
よく見ると、同部の上辺に特に切り込みが設けられなどして、もとからこのように作られたことが分る。ただしその何の故であるかは明でない。

この櫛の玉質はいま全く風化していて、一面は白色であり、他の面は淡褐色を呈して、それに高い滑沢が見られる。なお全面鮮かな水銀朱に染んで、それ等の調子が如何にも殷墟物に通じて見るところに一致して居り、而もいささかも出土後手を加えた形迹などなく、掘り出されたままのすつきりとした土中古の趣を具えているのは、遺物の眞実性を端的に示すものとして注記すべきであらう。

ちなみに形の上から右の櫛と似た遺品が既に一つ紹介されている。黄濬氏の『鄴中片羽』初集下冊の第二二枚の裏に表裏の写真を載せたものがそれである。私はまだ実物を見ていないので、確かなことは申せないが、写真からすると、大体よく似た形で、やはり上半に正面向の獣面が刻出されてある。ただしその獣面の下半がやや間のびがして異様に見えるし、格子目の刻文ある帯から下の十二本の歯のそれぞれの間が恰もみづかきの様につらなつて、僅かに先

端のみ游離すると言う変つたもの、引いて、その点ではなお
実物に就いて詳しい調べを加える要が認められるのである。

挿図第二 ミネアポリス美術館蔵利器形写真

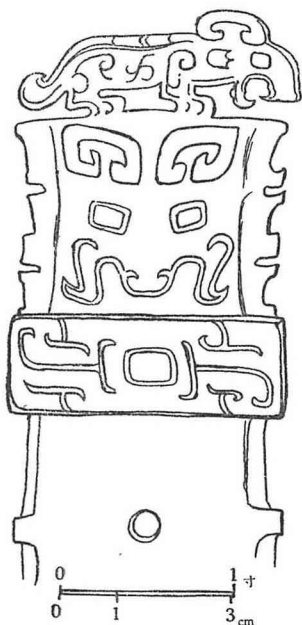


五 以上櫛たることの自明な例の外に、初に挙げた器の
一部がもと同じ櫛であつたと認められるミネアポリス美術
館の遺品は、挿図第二に写真を載せたような、現在では全
く違つた形のものである。その形は嵌石装飾文の銅の云わ
ば柄の一部を中にして、一方に玉の「内」を、また他方に
同じく玉の戚を、それに嵌め込んだところ、いまや実例を
加えた殷代に於ける儀器的な利器（Ceremonial tools）の
一つと見られる形をしていて、而も部分的にはかなり違つ
た趣を具えた点に特徴がある。その個々の部分はどれも殷

代の器とするふさわしいものであるので、一般には現形
を以て同時代のそう言う器の一例とする見方が行われてい
る次第である。

併し仔細に実物に就いて観察して行くと、上下に作られ
た凹みに嵌め込んだ二つの玉と、その銅の部分との関係が
何となくしつくりとしておらず、同部に見受ける鏽は後の
作為と思われる点で、これを本来のままの形であるとする
に疑が挿まれるのであり、更に多くの確實な此の類の「内」
がすべて銅で玉援を嵌め込んだ部分と一つに作られている
に對し、形から当然秘（柄）が着けられる筈の部分に、「内」
からつづいた獣面の装飾が施されると云う奇態な事実

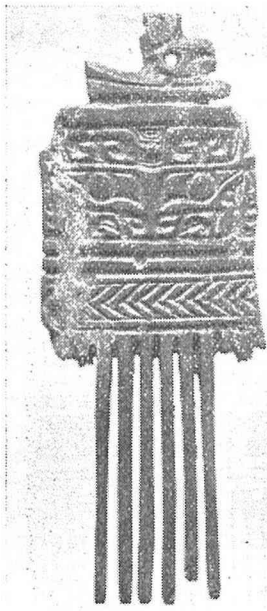
第三圖 ミネアポリス美術館蔵利器形の一部形状圖



を以てすると、此の現形が中国での古美術品化した遺物に多い後の作為とする推定を強めるのである。そしてこの場合、その「内」に当る部分が挿図第三に示すように、この小文の最初に書いたカールマン氏の櫛の歯を除いた部分に近似する所から、出土の際それの欠けたものをば利用したとする推測を描かしめることになる。ここで右の玉質の色沢の相似ていることがまた思い併される。果して然らば、ここにも一つの玉櫛の遺存が認められるわけである。

六 玉で作られた以上の櫛の諸例に対して、私の知つてゐる骨製の遺品は、現在なお上に書いた江口氏の一例に限

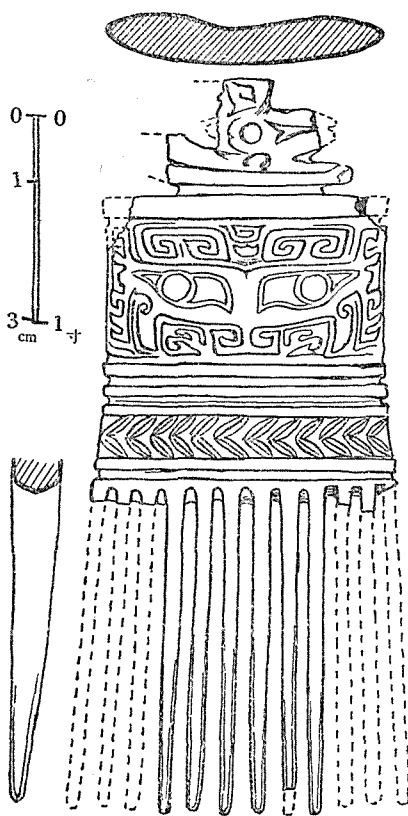
挿図第四 骨櫛写真



中国殷代の櫛に就いて（梅原）

られてゐる。この遺品は殷代の各種の彫骨器と共通した外觀を呈するが、質料の関係からでもあるであろう、破損してそれが可なり目立つてゐること挿図第四の写真の如くである。併し現存の長さ三寸五分五厘の体の下半に長い歯が残つて居るので、その櫛であることは疑うの余地がなく、更に上半に刻された獣面が、殷代の尊彝文のそれを髣髴せしめる特色を具えている点で、骨の工合と併せて、よく殷代の器たることを察せしめるのである。私は昭和二十六年の夏、紐育大学のサルモニー教授と共に江口氏の蒐集品見学の際、機会を得て破損した右の櫛の復原を試みて、その結果からこの遺品への興味を高めることになつた。

第五図はその復原形であるが、これに依ると櫛そのものの形が玉のそれ等と同様であるばかりでなく、十二本を数える長い歯の工合なり、所謂浜の部分飾つた獣面が、骨に刻された関係上、玉の場合よりも遙かに鋭く刻出された整つたものであり、更に上辺の半ば失われた立体飾りが、側面の禽形であつて、示す形が骨笄の頭飾りによく見られるものと同じであることが知られる。そして同部にやはり



挿図第五 骨製櫛復原形状図

小孔を穿たれてある。かくてその復原形の、後に知つたカールマン氏の玉櫛と異曲同巧であることが、自から時代相を示したものとることに思い及ぶのである。

七 現在知見に上つた殷代のものと認められる櫛の実例は、以上に限られていて、それは骨筭に較べるとなお極めて少数である。従つてそれ等から直ちに當代の櫛の全般を論ずることなどは出来難いわけである。併し現在でもそうであるように、もともと植物質で作られたと思われる櫛の

場合に於いて、将来とても多くの実例の

発見を期待することが困難のようである

し、現在知られた最も古い戦国から漢に

互る実例に就いて見る際、朝鮮の楽浪郡

の場合では、稀に見る玉櫛が多くの木櫛

と同様な形であるところからすると、古

く遡ることではあるが、ここでも玉や骨

の若干例から、その時代の櫛の性質を推

測することは、許される可きであろう。

いま是等の遺例の示すところがすべて相

似た形をしているばかりでなく、その所謂涙に一樣に獣面

飾を施した点で同じ趣を呈していることからすると、そ

こに自から当代行われた櫛の形が反映されていると見得る

であらう。尤も此の場合細部の点では齒に長短があつたり、

また上辺の飾りでは単なる小突起のものと、禽獸の側面形

を表わしたもの、二者の並び存することなどの差異はある

が、而も後者のいづれにも、その部分に紐でも通したと思

われる小孔を伴うた点で一致するのであつて、それ等の上

に一つの型のあることが示唆される。処で櫛としてのそこに見られる形たるや、繁褥で特殊な刻文を施したことをしばらく除外すると、既に発達したものなることは多言を要しないと思う。然らば此の面でも殷後半の物質文物の発達の著しかつたことが認められる次第である。

なおここで本来植物質で作られるを常とする櫛に於いて、上に挙げたような立派な玉の櫛の存在は、当代の攻玉の技術の造詣を示唆するものたると共に、こう云う豪華なもの——それは勿論限られた階級の人達であろうが——を使用した社会の存在を裏書きするものであることをも記すべきであろう。

このような点は暫らくおくとしても、此の櫛は既に知られた骨笄の類と併せ観て、殷代人の服飾の一面を推す上にある資料となるわけであるので、引いてそれに聯関した服飾そのものの如何が又現実の問題となつて来る。これに就いては新出の殷代の彫像が直接の資料として当然考慮に上るのであるが、現在の処ではそれ等の彫像には一つの型があつて、なほ右のような問題に役立つ面に乏しい憾をの

中国殷代の櫛に就いて(梅原)

こしてゐる。ただその間にあつて、現在フォッグ美術館に蔵するウインスロップ蒐集品(Winthrop Collection, Fogg Museum of Art, Harvard University)中の玉の小さな立像——その写真は既に拙著『河南安陽遺物の研究』に載せ

挿図第六 殷墓出土玉人形状図



四三

た——は珍らしく、その認められるものであつて、ここに紹介した櫛と結びつく頭髮についても、かぶつた冠帽の下に、それが前で左右にわけて、然る後巻いたと思われる結髪だつたろうことを推さしめるものがあるのは注目されるべきである。既に同像の形状図を載せて、今後に於ける

相似た遺例の新しい出現に期待をかけた。終りに是等の遺品の調査にあらゆる便宜を与えられた収蔵者の方々に謝意を表すると共に、挿図の写真もその寄与に係ることを明記して置く。

(一九五四年七月四日稿)

会員移動

新入会

加地 晃子

前田 正名

上智大学史学会

熱田 公

武田 久二

住所変更

平島 貴義

東京都千代田区紀尾井町七

里井彦七郎

梅原隆章

松山 宏

和多田 治子

三上次男

河野通博

The so-called "Stamp Act Riots"

—chiefly from the viewpoint of considering the
American Revolution as a social movement—

By

A. Imazu

The proposition that the American Revolution means the dual resistance against Great Britain and within the colonies still remains to be investigated especially in a way of looking at the complexity of social struggle within the colonies. The reason why the Stamp Act Riots ten years before the Declaration of Independence makes an epoch in the history of the Revolution can be explained not only by the fact that a united front covering the whole colonies was formed by the upper class and and lower classes, but by the fact that as the front was gradually middle bisected in the course of the riots, these two classes came to conflict each other under the name of "Liberty". As this appearance seems to show the prototype of the revolution, we will see the social character of the American revolutionary movement through the formation and bisecting tendency of radical society, "Sons of Liberty", claiming each other to be "true Sons of Liberty".

A Study on the Combs during the Yin Dynasty

By

S. Umehara

This article is an attempt to describe some characteristics of the combs from the Yin-site, Ho-nan-shêng (河南省), China. I have picked up some of the combs of jade and a comb of bone. Having explained the characteristics of them, I attempted to find a typical feature common to all the finds. This, I might say, will illustrate a developed phase of civilization under the Yin dynasty and its effect upon the modes of costume of the age.